仮面ライダーW外伝～黒の少女は風と共に嗤う～

もふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーＷ外伝～黒の少女は風と共に嗤う～

【Ｎコード】
Ｎ４４０９Ｎ

【作者名】
もふ

【あらすじ】
ここ風都では、最近ドーパント被害専門の復讐代行人“黒の少女”の噂が絶えない。
その正体を突き止めるべく、鳴海探偵事務所の面々が事件の真相究明に乗り出した。
そこで彼らが出くわしたのは、復讐の女神の名を持つ漆黒の“仮面ライダー”だった。
「街の癌をさぁ。消して欲しいって思ってる人が居るんだよ」

「例え街を泣かせる奴だとしても、その命を奪う権利は誰にもねぇ…！」

ＴＶ本編では語られる事の無かったＷの戦いが今、幕を開ける。

――これで決まりだ…！

#1　Nとの邂逅／その少女、漆黒（前書き）

※ＣＡＵＴＩＯＮ！

これはドジでアホなタコ作者が息抜きに執筆を始めた“仮面ライダーＷ（ダブル）”の二次創作作品になります。
当然更新は“ジョーカー”“アーリア”が優先されますので遅いです。
それを承知の上で、尚且つしかたねぇなぁ読んでやるよ！という海よりも広い心をお持ちの方は是非お立ち寄りくださいませ。
それでは。ごゆっくりどうぞ

仮面ライダーＷ、今回の依頼は！

#1　Nとの邂逅／その少女、漆黒

Nとの邂逅／その少女、漆黒

――ここは風都。点在する風車と、その名から分かるように風の恩恵を多分に受ける街である。その街のシンボルでもある巨大な風車を頂く建造物、“風都タワー”から見下ろす街の景色は圧巻で、“風とエコの街”としても知られる比較的有名な都市だ。

そのとある路地裏。

「もう逃がさんぞ…真島太郎。“ガイアメモリ”の使用及びそれに伴う強盗殺人・破壊活動の罪で逮捕する」

自らの目の前にあるゴミ箱やらガラクタやらを押し退けて、風を切る様に男は逃げていた。しかし、選んだ道が悪かったのかやがて行き止まりに追い詰められた男は、地面に傷跡を残しながら剣を引き摺り、鋭く見据える後ろに立つ赤いレザージャケットを着た青年を睨んだ。

「ちきしょぉ…こんな所で…終わってたまるかぁっ！！」

男は懐から大きめの、ＵＳＢメモリのような長方形に禍々しい装飾を施した何かを取り出し、その表面にあるらしきボタンを押した。

《ＧＲＩＺＺＬＹ！》

途端禍々しく音声を発したそれを喉仏に浮かび上がる黒い文様、コネクタに差し込んで行く。するとその姿は一回り大きく、獣の体毛を纏い凶悪な牙と爪を持った巨大な怪物へと変質した。

この風都にて流通している人間を怪物、“ドーパント”に変貌させてしまうアイテム、地球の記憶を閉じ込めた“ガイアメモリ”を使用したのである。

それを見た青年――照井　竜はバイクのハンドル部分にも見える機械を取り出し、腰にあてがった。更に懐から真島のそれとはデザインの異なる赤い“ガイアメモリ”を取り出し、そのスイッチを押した。

《ＡＣＣＥＬ！》

「変…身ぃんッ！！」

《ＡＣＣＥＬ！》

キッと険しい表情でグリズリー・ドーパントを睨み付けた照井は宣言と共にその“アクセルメモリ”をベルト状になった機械、“アクセルドライバー”の中央上部のスロットに叩き込む様に挿入する。そうしてからグリップを捻り、次の瞬間には浮かび上がった赤い光が照井の身体を包んだ。光の中から現れたのは真紅の装甲をその身に纏う戦士。バイクのフルフェイスヘルメットにもよく似たバイザーを青く光らせ、右手に掴んだ剣を構える。

彼こそがこの風の都を守る希望の戦士である仮面ライダーの一人、“仮面ライダーアクセル”である。

「さあ、振り切るぜ…！」

アクセル専用の片刃の長剣、“エンジンブレード”を掲げてアクセルは真っ直ぐにグリズリー・ドーパントへと向かってゆく。

『うぉらぁあっ！！』

「チィッ！」

思い切り振り回された丸太の様に太い腕をエンジンブレードの腹で受ける。強固な刃はびくともしなかったが衝撃がアクセルの腕を突き抜ける。その痛みを無視し、すかさず脚部のホイールのスピンを利用して回転しつつ横一閃、グリズリー・ドーパントに斬りつける。怯んだその隙に巨体に目掛け更に追撃とばかりに袈裟にエンジンブレードを振り下ろして斬り裂く。

《ＥＮＧＩＮＥ！》

距離が僅かに離れた隙を見計らい、エンジンブレードの軽く降ると半ば辺りから折れて、剣の峰に配置されたメモリスロットが開放される。そこに灰色のメモリを起動し挿入したアクセルは剣を下段に構えて突っ込む。

『ぐ、ぅ…まだまだぁ！！』

《ＥＬＥＣＴＲＩＣ！》

すかさず彼が使うもう一つのメモリ、“エンジンメモリ”の能力の一つを起動させたアクセルは頑丈な装甲で攻撃を受けながらその胴に電撃を纏った突きを繰り出す。

『あがあぁ！！』

感電しながら吹き飛んで行くグリズリー・ドーパントに更に追いすがるアクセル。疾走体勢から急ブレーキを掛け慣性に従って敵を思い切り殴り付ける。ふらついた所に間髪容れずに踏み込み、大上段から星も砕けよとばかりにエンジンブレードを降り下ろす。

勢いに乗ったアクセルの馬力は陸戦に於いて強力であり、剛力を誇るドーパントすら圧倒する。ましてや数々の死線を潜り抜け、何度も傷だらけになりながら鋼の意志で戦って来た不屈の男、照井　竜にとってはこの程度の相手は造作の無いものだった。しかし、グリズリー・ドーパントの方もダメージこそあれど手強く、中々その戦意を失う事は無い。

――なら、これで決めてやる！

アクセルはぐったりと倒れてしまったグリズリー・ドーパントを尻目にエンジンブレードを地面に突き立てると、腰のアクセルドライバーのブレーキ部によく似たレバーを握り込む。

《ＡＣＣＥＬ！ＭＡＸＩＭＵＭ－ＤＲＩＶＥ！》

アクセルの青いセンサーが光り、マキシマムドライブにより増幅された“アクセルメモリ”の力が右足に収束する。必殺の一撃、“アクセルグランツァー”の体勢に入り、まさに飛び込もうとしたその瞬間、アクセルは無造作に鳴り響く乾いた手拍子と声に思わず動きを止めた。

「はぁーいストップストップ！それ以上やったら私怒られちゃうっ

てば！」

「何なんだ…ッぐはぁっ！」

毒気をぬかれた様につぶやいた照井のその致命的な隙をグリズリー・ドーパントが見逃す筈も無く、アクセルの胸部装甲に強烈な爪の一撃が振り下ろされ、それを受けたアクセルは火花を散らしながら路地裏に置かれた廃材に突っ込んだ。

「ありゃりゃ、間が悪かったかな？ごめんよっと！」

声の主はさして悪びれたような素振りも見せずに、その姿を表した。建物の上から何のためらいも無く飛び降りて。三階建ての建物の一番上からまるでちょっとした段差を降りて来たかのような軽い調子で着地したのは、黒い少女だった。長い黒の髪は前髪が切り揃えられ、病的なまでに白い肌と相俟ってあたかも日本人形のよう。身に纏うのは同じく黒に、白のラインが申し訳程度に入ったセーラー服。ストッキングを穿いているために露出しているのは顔と首と手のみとまるで日光を浴びたくない様にも見える。軽薄な笑みを浮かべたその表情、そして前髪の奥、猫のような形の目は爛々と黒曜石のような妖しい光を放っていた。

「くっ…何をしているっ！早く、逃げろ！」

廃材を掻き分けて立ち上がったアクセルは突如現れた少女に叫ぶ。が、当の本人はどこ吹く風、飄々と目の前に立つグリズリー・ドーパントを見据えている。その時真島にはほの暗い考えが閃いた。あの忌々しい赤い仮面ライダーに手も足も出せなくする方法を。すなわち、人質だ。

決定すれば行動に移すのは早かった。恐らく少女が恐怖で動けなくなる程の雄叫びをあげながらわざと怪物染みた大仰な素振りで近寄

る。

『…へ？』

そしてそのまま真島は恐怖の為か立ち尽くす少女を掴まえる筈だった。彼女が伸ばした自分の腕の上に乗り、その手にいつの間にか奪っていたエンジンブレードを握ってグリズリー・ドーパントの顔面を存分に斬り裂くまで。

『グ、ガァァアッ！？』

「…見くびっちゃヤだなぁ。私、こう見えて強いんだぞ？」

これにはさしもの照井も唖然とする他無かった。アクセルに変身せずにあの剣を扱った事なら照井にもある。しかし、目の前の彼女は鍛練を欠かさない照井が生身で引きずりながらやっと扱え、変身したアクセルのパワーを以て始めて満足に運用できるあの剣をまるで木の枝か何かのように軽々片腕で振るったのだから。いつもは自らへの質問を厭う照井であったがこの時ばかりは問わずにはいられなかった。

お前は何者なんだ、と。

「タダの美少女デス♪」

すると少女は振り向きざま、愛らしいウィンクをくれながらそう宣った。

すると痛みに狂っていたグリズリー・ドーパントが沸点を超えたかの様に激昂した。

『ふざけやがって！！どいつもこいつも俺をコケにしやがる！！もう頭に来た！てめぇも殺してやるぁ！』

「いやん、怖い怖い。……でも、殺されるのはそっちだよ」

『なにをっ！』

「思い上がるなよ。器が小さいくせにメモリのスペックに甘んじていっちょ前にぐちゃぐちゃぐちゃぐちゃ。依頼人が私に依頼するのもよく分かる。むかつくよ、お前」

全く緊張感の無い少女が不意に迸らせた不気味な程静謐な殺気に、怒りに吠えたグリズリー・ドーパントも思わず足を止める。感情の見えない平坦な言葉を吐いてから、少女は凡そ似つかわしくないどこか見覚えのある赤い無骨な機械を取り出した。

“ロストドライバー”

と呼ばれるそれは、照井の仲間が使用しているものに酷似していたからだ。

「あれは…左達の…！？」

《ＮＥＭＥＳＩＳ！》

驚く照井達をよそに少女はロストドライバーを腰に接続し、更に胸ポケットからあろうことか“ガイアメモリ”を取り出したのだ。艶も光沢も無い漆黒のガイアメモリから起動音、ガイアウィスパーが鳴り響き、ためらい無くメモリをスロットに差し込む。

「…変身」

《ＮＥＭＥＳＩＳ！》

ガチャリとメモリの差し込まれたスロットを斜めに倒すと、彼女の体に泥のような漆黒の物体が足下から纏わりつき、全身を覆って弾け飛ぶと中からは黒い装甲に包まれた戦士の姿が現れた。女性らしいシルエットにフィットしたスーツに肩や腕、脛を覆う黒い装甲。そして後頭部から二本、背中から四本、腰の後ろから二本づつ、太く長いチューブの様なものが生えており、その異様さを際立たせる。顔の真ん中の大きな赤い一つ目は“Ｎ”字に区切られ、頭部の左下と右上にエッジの利いた角が斜め後ろに突き出している。その姿は紛れも無く、“仮面ライダー”に等しいものだった。

「――…さぁ、処刑を始めるよ？」

漆黒の少女は、まるで全てを包み込み、愛する慈愛の女神の様に両手を広げ、仮面の下で悦楽に目を見開き凄惨な笑顔を浮かべた。

#1　Nとの邂逅／その少女、漆黒（後書き）

とまあ、最近の熱い展開と劇場版を見てきた勢いで投稿してしまった作品です。
取り敢えずこれからメインの連載二作の合間にちょこちょこと更新して行く予定ですので、宜しければお付き合いくださいませ～

#2　Nとの邂逅／黒猫は不気味に微笑んだ

#2　Nとの邂逅／黒猫は不気味に微笑んだ

「――…さぁ、処刑を始めるよ？」

『ほざけぇこらぁあっ！』

両手を広げて言い放った黒い戦士は猛々しく、或いは恐れを成して猛進してくるグリズリー・ドーパントの体当たりを、しなやかな体躯を宙に舞わせて躱した。まるで曲芸か何かのように身を翻して着地した彼女は両腕を真横に広げ、同時に前に翳した。と、その動きに合わせて腰の後ろから尻尾のように伸びていた二本のチューブが指向性を持って飛び出して行き、目の前の巨躯を拘束した。

「そぉ～れっ！」

可愛らしい掛け声と共に、次の瞬間にはグリズリー・ドーパントは空中へと跳ね上げられていた。それを追うかのように、背中の四本のチューブが路地裏の狭い建物の間にしっかりと突き刺さり、まるで黒の戦士の身体を支え生き物のように昇って行くと、その天辺で反動を使って高く飛んだ。そのまま重力に従い落下するグリズリー・ドーパントを背中と腰の六本のチューブで掴まえて、その腹部に嫌と言う程の蹴りを食らわせ、無造作に地面に向けて叩き落とした。

『がぁぁぁあっ！！』

まるで獣そのものの様な痛みの悲鳴を上げる真島は、もはや自分の体に起きている事が理解出来ていなかった。
その近くに、やはり何事もなかったかの様に着地した彼女は、地面に転がったエンジンブレードを拾い上げ、そのメモリスロットからエンジンメモリを引き抜いて投げ捨てた。

「お、おい！」

「いーじゃんいーじゃん。ちょっと位貸してよねー」

自らの愛剣を二度も、あたかも元々自分の物であるかのように扱う黒の戦士に今まで事を見守っていたアクセルが抗議の声を上げるが、それに耳を貸さないまま、彼女は自分のガイアメモリを引き抜いてエンジンブレードのメモリスロットに装填した。

《ＮＥＭＥＳＩＳ！ＭＡＸＩＭＵＭ－ＤＲＩＶＥ！》

「何だと！？」

「あらよっと」

驚愕するアクセルに目もくれず、エンジンブレードを片手に下げた彼女は腰、背、後頭部から全てのチューブを伸ばしてグリズリー・ドーパントの首、腕、胴、足を拘束したまま持ち上げた。もはや彼はくぐもった悲鳴しかその牙の間から漏らさない。

「ばいばい」

切っ先をグリズリー・ドーパントに向けたまま実に無感動にそう告げた瞬間、チューブが一気に彼女の方へと戻ってゆき、その過程でぞぶり、という感触をしっかりと伝えてエンジンブレードがドーパ

ントの厚い皮膚を貫いた。肉を断ち切るその感触にぞくぞくとした快感が彼女の背中を這い回り、仮面の下で思わず吐息を漏らす。マキシマムドライブによって貫かれたドーパントの体は刺し傷の部分から徐々に黒い染みが広がって行き、それが速やかに全身を埋め尽すと同時、グリズリー・ドーパントは声もなく大爆発を起こした。

「やったのか……ッ！？」

爆風に乗ってアクセルの足下まで飛んで来た真島の“グリズリーメモリ”はパンと乾いた破裂音を立てて破壊された。思わぬ乱入だったとはいえ、風都を守る三人目の“仮面ライダー”がこの街にいたなどとは思わなかった照井は、その素姓を問おうと歩み寄ろうとし、彼女の足下に倒れる真島の様子を見て息を呑んだ。

「う、ぐっ！あがぁっ！！ぎ、ぁぁぁぁあ！！！」

メモリブレイクされた人間は、大抵使用していたガイアメモリの副作用によって昏倒してしまう。医療施設で意識が回復するのを待ち、その後正式に逮捕するのが常だが、真島の様子がおかしい。胸を辺りを掻き毟りながら目を見開き、顎が外れんばかりに口を開いて叫んでいる。

今までに照井がメモリブレイクしたガイアメモリ犯罪者はこの様な症状を見せなかった。唯一、宿敵とも呼べる井坂に限っては余りに大量のメモリのせいなのかブレイク後に消滅してしまったが。

「おい！どうした！？…っ貴様、一体何をしたッ！！」

アクセルメモリを外し変身を解除した照井は駆け寄って真島を抱き起こして呼び掛けるが一向に彼は叫び続けている。険しい表情で漆黒の仮面ライダーを睨み付けるもその無機質な仮面から表情は読み取れない。

「うん？街の癌を、消したんだよ？」

至極当たり前に言ってのけた彼女の言葉に照井が思わず絶句する。人を人とも思っていないような言葉に言い知れぬ怒りを感じた彼がふと抱き抱えている真島の様子が妙な事に気付いたのは数瞬遅れてからだった。真島の体に黒い泥の様な物が広がり、それが全身に達すと、そのままドロドロと溶けて照井の手から零れ落ちていく。それは地面に染み込み、まるで何もなかったかのように消えた。

「リクエストは三人。いずれもそいつに娘・恋人・父親を殺された被害者遺族。まぁ、屑には丁度良い幕切れだよね。しかも報酬は三人分だし。なんてゆーか、うまうま♪」

少女がまるで親におもちゃを買い与えられた子供のように無邪気にはしゃぐその姿に、無言で立ち上がった照井は烈火のような怒りを爆発させた。

「人の命を簡単に奪うなど……貴様は、貴様はそれでも仮面ライダーか！！」

《ＡＣＣＥＬ！》

「仮面ライダー…。なぁにそれ？」

「俺に質問を…するな！！」

《ＡＣＣＥＬ！》

興味の無い事のように尋ねた少女の言葉を斬り捨てた照井は怒りの

任せるまま、再び仮面ライダーアクセルへと変身した。激情に任せ少女に殴り掛かるが、のらりくらりとその拳を、蹴りを避けて少女は鬱陶しそうに呟いた。

「うーん。お兄さんと遊ぶ気分じゃないんだなぁ…」

「抜かせぇッ！！」

アクセルが放った勢いの付いた見事な回し蹴りを跳躍して避けた黒い仮面ライダーは、そのままアクセルの肩を踏み台に易々とビルの壁面へ飛び移り、背面のチューブを使いさながら蜘蛛のようにビルの屋上へと登って行く。逃がすまいとアクセルも追おうとするが狭い路地にチューブを叩き付けて粉砕した建物の一部による瓦礫の雨を降らされ、足止めを食らってしまう。

一際大きな瓦礫をエンジンブレードにて破砕した時には、既に黒い仮面ライダーはどこにも居なくなっていた。

「……」

やり場の無い怒りを抱えたまま照井は変身を解いた。

――人の命を簡単に奪う奴が、“仮面ライダー”であって良い筈がない。

仲間との絆の中で、かつては憎しみに囚われていた照井もまた、今では街の悲しみを振り切る為に戦う風都の希望たる“仮面ライダー”となって戦っているのだから。何にせよあの殺人鬼を止めなくてはならない。彼は、懐から携帯電話にしては随分と大きな、無骨なそれを取り出すと何処かに掛けた。

「…左。今すぐ風都署まで来い。“質の悪い仮面ライダー”が現れた…」

#2　Nとの邂逅／黒猫は不気味に微笑んだ（後書き）

なぜ最速で書き上がったのがこの作品なんだろうか（汗）

竜君がかなりブチギレてますがやり過ぎた感は否めないですね…そしてそろそろ黒の少女の名前を出さなければ、分かりづらくてかなわんですね。申し訳ありませんっ

#3　奇妙なE／牙無き者の牙

#3　奇妙なE／牙無き者の牙

風が爽やかに吹き抜ける中、急ぐように大股で、そして焦れたように早足で、風都の街を、少年は――フィリップは進んでいた。
普段は余り外出する事のない彼だったのだが、今日ばかりは違った。そのまなざしには明確な意志を宿し迷いのない足取りで歩いている。

「ねぇ、フィリップ君！フィリップ君てば！」

その後ろから、小走りに近寄って来る少女。先程からズカズカと進むフィリップに追いついた彼女はバッグから「ちょっと待たんかい！」と書かれたスリッパを取り出して彼の後頭部をパコッ！と叩いた。軽く前につんのめって足を止めたフィリップは叩かれた部分を押さえながら怪訝そうに、彼女を見た。
「何するんだい亜樹ちゃん。早くしないと一日２０食限定の“激辛風都チャーハン”が無くなってしまう。全く、あれほど翔太郎にモーニングコールを頼んでおいたのに…僕の検索に拠ると“中華の風見鶏”は開店する１０時前にすでに列が成されている。つまりそれに並ぶ事が出来なければ“激辛風都チャーハン”を食べる事は不可能だ」

「いや、たががチャーハンでしょ？」

スリッパをしまって、鳴海　亜樹子は困ったように言った。しかしフィリップはそれを意に介した様子もなく、まさに一分一秒が惜し

いとばかりに再び足を進め出した。放っておく訳にもいかず、亜樹子も肩を竦め、後を着いて行く。

「やめてくださいっ！」

「…なんだ？」

目当ての店舗が見えて来るにつれてフィリップは自身の知的好奇心からなる喜びに笑みを深くした。列まで後一息、小走りに駆け寄ろうとした所で彼は少女の声を耳にした。それは明らかにこの穏やかな風が吹く風都に於いては異常。そしてその言葉は誰かに向けられた拒絶の言葉だ。

相棒の言葉を借りるならば、この街を泣かせるような者への。

亜樹子も異変に気付いたらしく、二人揃ってその声の聞こえた方へと足を運ぶと三人組の、ヤクザ、というよりはチンピラのような風体の三人組が二人の少女を囲っていた。

「おい！てめぇぶつかっといて詫びの一つもねぇのかよ！」

「で、ですから申し訳ありませんと先程から…」

「お前じゃねえ、そっちの黒ずくめに言ってんだよ！」

サングラスを掛けたごつい男の両隣りから小太りの男とひょろ長い男が口々に言う。割烹着を着た和服の少女はそれに怯え、もう一人の黒いセーラー服に身を包んだ少女の後ろから細々と抗議をしている。和服少女を庇うようにして立つ黒いセーラー服の彼女はその男達を興味なさげに眺めている。

「あ、ごめんごめんっ」

「れ、玲華さま…ぁ…」

まるで人を馬鹿にしたような物言いに、リーダーの男のこめかみがひくりと震えた。効率的なコミュニケーションでは無いなと、フィリップは思う。それでも今まさにスリッパ片手に飛び出していきそうな亜樹子を危険な目に合わせない為にも、フィリップは男達に歩み寄り、三人組のリーダーと思われる人物に歩み寄った。

「おい嬢ちゃんたち…素直に謝りゃ他の奴等と同じようにさらってやったのによ…ちょっと痛い目に合わなきゃ分からないらしいな……」

《ＣＨＡＭＥＬＥＯＮ！》

すると男は毒々しい黄緑色の長方形、“ガイアメモリ”を取り出して自分の舌に浮かび上がったコネクタに差し込んで行った。

『クルァァァァ！！』

甲高い耳障りな叫びを上げて男が変質したカメレオン・ドーパントは少女二人に忍び寄る。まさかガイアメモリも取り出すとは思いも寄らなかったフィリップは慌てて亜樹子の携帯電話をひったくり、電話を掛けた。自身の相棒である男に。

『おう亜樹子、どうした』

「翔太郎！ドーパントが現れた。変身だ！」

『フィリップ！？……あぁ、わかった。行くぜ、相棒』

それきり電話は切れ、代わりにフィリップの腰に赤い機械が銀色の帯と共に滲み出るように現れ腰に巻き付きベルトとなった。

「…美鶴、怪我しちゃヤだから下がって」

玲華と呼ばれた黒の少女は和服の少女、美鶴を下がらせて自分は下げていたバッグからロストドライバーを取り出そうとする。その瞬間、どこからともなく白い何かが回転しながら何度も何度もカメレオン・ドーパントを怯ませ翻弄した。
振り払われたそれはまるで意志を持っているかのように、ゆっくりとこちらに歩み寄って来た、黒い癖毛をクリップで止めて、長袖にズボン、丈の長い袖無しの薄手のパーカーを着込んだ、玲華達と同い年くらいの少年の手に収まった。
その腰にはロストドライバーによく似た赤い機械を巻いている。その姿に玲華は取り出し掛けていたそれをバッグの中に押し戻した。

《ＦＡＮＧ！》

「変身」

ガイアウィスパーによる起動音、そして宣言に続いて左側にひとりでに現れた黒いガイアメモリをしっかりと差し込み、手に収まった白い恐竜型のメカを変形させたファングメモリを同じく右側のスロットに付きたて、折り曲げながらドライバーを両側に開いた。それにより右側の部品を覆うような形でベルトに装着が完了する。

《ＦＡＮＧ！ＪＯＫＥＲ！》

風と共にフィリップの体に微細なパーツが集まり足先から白と黒、

右と左に異なる二色の鎧を形成し、頭部には爛々と赤い二つの瞳と“W”を象ったアンテナを現して、全身が鋭く尖ると変身は完了したようだった。
白に黒、牙の記憶のファングメモリと切り札の記憶のジョーカーメモリによってフィリップが姿を変えた姿。街を守る戦士“仮面ライダーW・ファングジョーカー”へと姿を変えた。黒い半身の左目がチカチカと点滅し、フィリップとは違う声が聞こえる。

『フィリップ、こいつは…』

「あぁ。メモリは“カメレオン”。特性から考えてどうやら連日の少女誘拐事件の犯人の可能性がある」

『なるほどなァ…街を泣かせる奴は俺たちが許さねぇ』

「『さぁ、お前の罪を数えろ！』」

Wは右半身を向け、軽く握り込んだ拳を顎辺りに持って行き、そこからぴっと人差し指をカメレオン・ドーパントに差し向ける。

『仮面ライダー…か…！』

Wは両手両足を大きく広げ、飛び掛かる。獣のような勢いで距離を詰めたと思うと握り込んだ拳で顔面を強く殴り付ける。着地と同時に振り抜いた拳の一撃でカメレオン・ドーパントが派手に吹っ飛んで行く。

《ＳＨＯＵＬＤＥＲ－ＦＡＮＧ！》

「ハァッ！」

真紅のベルト、“ダブルドライバー”の右側にある。恐竜の顔を模したファングメモリの鼻先から伸びるタクティカルホーンを二度タップすると、右肩から鋭い白い刃が伸びて来た。右手にそれを掴むと迷い無く投げつける。複雑な軌道を描いた白の飛刃は狙い違わず直撃、カメレオン・ドーパントを何度も切り裂いた。

『この…調子に乗るな！』

『んなっ！？』

起き上がった奴の姿が、不意に消えた。そして次の瞬間にはWの身体は中に投げ出されていた。防御しようにも攻撃される瞬間を把握出来ない為、Wは路面を転がり、すぐさま立ち上がる。

「なるほど…“カメレオンメモリ”はその名の通り保護色を使って敵の目を欺くようだ」

『もはや保護色どころか“インビジブル”レベルだぜ…うぉ！？』

一瞬Wの目の前の景色が僅かに歪んだと思うと次の瞬間には思い切り弾き飛ばされ、左半身に宿る相棒、翔太郎と呼ばれた青年の焦れたような声が響く。しかしフィリップは猛獣のような身軽さで何事も無く受け身を取りその白と黒の体を起こした。

「心配ない。既に奴への対抗策は講じたさ」

するとWの台詞を聞いてか上空から青と黒の機械的な蝙蝠が羽を上下に動かしながらやって来た。彼らのサポートツールの一つ、“バットショット”である。バットショットは周囲を飛び回りながらカ

メラのフラッシュのような強烈な光を辺りに放ち始めた。それがある一定の位置を照らした瞬間、影が地面に浮かぶ。

「そこだ！」

《ＡＲＭ－ＦＡＮＧ！》

タクティカルホーンを一回タップして、右手首に生やした刃・アームセイバーを構え、一足跳びに真っ直ぐ踏み込むと勢いよく振りかぶり、一気に振るう。すると何も無い筈の空間から激しく火花を散らしながら、カメレオン・ドーパントが現れた。

『ぬぐぁあ…な、何故だぁ！？何故分かった！？』

渾身の一撃を受け、膝を突きながら苦しげな息の下、当惑したような声を漏らすドーパントに対し、Ｗは気取ったように顎に手を添えて語り出す。

「簡単な事だよ、保護色とは本来立体的な形状をしている筈の生物がそれを打ち消すような色合いに体表を変色させ、背景に溶け込んで身を守るものだ。君のそれは背景を完璧に自分の体に写し取る優秀なものだが、光の当たり方によっては全く意味を成さない。自然界に於いて真横などから強い光を当てられる事は殆ど無いが、バットショットはそれが出来る。立体である以上光が当たれば影だって出来る。そういう事さ」

『そろそろ決めようぜ、相棒』

「あぁ」

《ＦＡＮＧ！ＭＡＸＩＭＵＭ－ＤＲＩＶＥ！》

タクティカルホーンを三回タップ。音声と共に足を大きく開いて腰を落とし、構えたＷの右足首から白刃が伸びて来る。獣の挙動で高く飛び上がり、青白い光がＷの右足を激しくスパークさせた。

「『ファングストライザーッ！！』」

飛び回し蹴りの要領で繰り出された牙の一撃は狙い違わずカメレオン・ドーパントを捉えて激しく爆発させた。

爆炎の中から立ち上がるＷの足下には、手足を投げ出して伸びている男と砕けたカメレオンメモリが転がっていた。

『決まったな…』

「ふわあ…」

気障ったらしく呟きながら左手でその角を軽く指でなぞるＷに美鶴は思わず半開きになった口から感嘆の吐息を漏らした。玲華は逃げ出した下っ端の二人に見捨てられ倒れたままの男とＷを交互に見やった。

（やっぱり、殺さないんだぁ）

つい数時間か前、依頼中に出くわした“仮面ライダー”とやらも人を殺す事を良しとしてはいなかった。それを何となく聞いてみたかったのだが、風に吹かれるように二色の鎧が消え失せ、その場に少年が現れた時にはもう、美鶴がここぞとばかりに頭を下げまくっていた。

「玲華様を助けて下さり本当にありがとうございました！貴方様は私たちの恩人でございます！」

「気にしないでくれたまえ。それじゃあ僕はこれで…」

「いえ！一度屋敷にお越しくださいませ！命の恩人にこのような真似をする事は黒条の名折れでございます！」

美鶴は有無をいわさずフィリップの右手首を掴むとずんずんと何処かへと進んでしまい、玲華は仕方なくそれに続く。フィリップは何とかチャーハンを食べようと説得を続けているのだが意味を成さず、後には亜樹子がその場にポカンと口を半開きにしながら残され、我に帰るなり慌てて彼女達の後を追っていった。

「ちょっ！あたし聞いて無いってばあ～！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4409n/

仮面ライダーW外伝～黒の少女は風と共に嗤う～

2010年10月12日14時23分発行